



6 学習評価の総括例について

各学校は以下を参考として、教師の指導改善及び生徒の学習改善につながる学習評価をする。

- ・ 年度当初に観点別学習状況の評価の観点ごとの総括及び評定への総括の考え方や方法を教科等部会等で共通理解を図り、学校として一貫性のある説明ができるようにしておく。また、年度末に次年度の評価場面や方法等を検討する。
- ・ 年度当初及び必要に応じて生徒が学習の見通しをもてるよう学習評価の方針等を生徒と保護者に説明するとともに、学習評価の妥当性や信頼性を高めるよう随時見直しを図る。

国立教育政策研究所が発行した「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（以下、参考資料とする。）には、記号や評定について以下のように記されている。

「観点別学習状況（分析的に評価）」について

- A：「十分満足できる」状況と判断されるもの
- B：「おおむね満足できる」状況と判断されるもの
- C：「努力を要する」状況と判断されるもの

「評定（総括的に評価）」について

- 5：「十分満足できるもののうち、特に程度が高い」状況と判断されるもの
- 4：「十分満足できる」状況と判断されるもの
- 3：「おおむね満足できる」状況と判断されるもの
- 2：「努力を要する」状況と判断されるもの
- 1：「一層努力を要する」状況と判断されるもの

総括は、おおむね以下の方法が考えられる。

例1： 評価結果のA、B、Cの数を基に総括する場合（小学校編で詳しく説明）

評価結果のA、B、Cの数が多いものが、その観点の学習の状況を最もよく表現しているとする考え方に立つ総括の方法である。

「A B B B」→B（評価結果のA、B、Cの数が多いものがはっきりしている）

※ 「A A B B」のような同数の場合や「A B C」のような三つの記号が混在する場合等には、あらかじめ各学校において基準を決めておく必要がある。

例2： 評価結果のA、B、Cを数値に置き換えて総括する場合（本資料で詳しく説明）

何回か行った評価結果のA、B、Cを例えばA=3、B=2、C=1のように、あらかじめ学校で決めた基準によって数値化し、平均して総括する方法がある。

6-1 学期末の観点別学習状況の評価へ総括する例

総括の結果をBとする範囲を[2.5 ≥ 平均値 ≥ 1.5]として、総括した事例である。

事前に、教師間で判定基準を確認する。

①単元の総括

時 間	1	2	3	4	5	6	7	8	合計	平均	評価
知識・技能	*	3点	*	*	*	*	3点	3点	9点	3.0	A
思考・判断・表現	*	*	*	*	2点	3点	3点	*	8点	2.7	A
主体的に学習に取り組む態度	*	2点	*	*	*	*	2点	*	4点	2.0	B

「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」を計画的に位置付けた例である。なお、上記の1, 3, 4時間目等に見られる「*」は「指導に生かす評価」を示している。

②学期末の総括

単 元 名	単元1	単元2	単元3	合計	平均	学期末の評価
知識・技能	A	A	A	9点	3.0	A
思考・判断・表現	B	B	A	7点	2.3	B
主体的に学習に取り組む態度	A	A	B	8点	2.7	A

6-2 学年末の観点別学習状況の評価へ総括する例

この総括例では、評定への総括を見通した記録として以下の記号を使用した詳細な記録を別にとっておくことを併せて示している。なお、指導要録には「ABC」等の3段階で記録する。

Ⓐ：「十分満足できるもののうち、特に程度が高い」状況と判断されるもの
A：「十分満足できる」状況と判断されるもの
B：「おおむね満足できる」状況と判断されるもの
Ⓒ：「努力を要する」状況と判断されるもの
C：「一層努力を要する」状況と判断されるもの

総括した結果を詳細に記録する場合、例えば各記号の範囲を以下のようにすることが考えられる。

記録する記号	平均値の範囲の例
Ⓐ	平均値 > 2.8
A	2.8 ≥ 平均値 > 2.5
B	2.5 ≥ 平均値 ≥ 1.5
Ⓒ	1.5 > 平均値 ≥ 1.2
C	1.2 > 平均値

総括した結果を左図の基準により5段階で記録した例である。

総括の結果をBとする範囲
[2.5 ≥ 平均値 ≥ 1.5]
として総括(6-1と同じ)

	1学期の評価	2学期の評価	3学期の評価	合計	平均値	学年末の評価	評定への総括を見通した記録(詳細な記録)
知識・技能	A	A	A	9	3	A	Ⓐ
思考・判断・表現	B	B	A	7	2.3	B	B
主体的に学習に取り組む態度	A	A	B	8	2.7	A	A

6-3 学年末の観点別学習状況の評価を評定へ総括する例

6-3-1 基本的な考え方

学校は、観点別学習状況の評価と評定の関係が以下の例示のようになっていることについて十分留意した上で、評定への総括の方法について決定し、教師間で共通理解を図ることが大切である。その上で、生徒及び保護者に十分説明し理解を得ることも大切である。

なお、中学校における観点別学習状況の評価と評定の関係は、以下のとおりである。

- 各観点の評価が全てA
→ 評定は5か4となる(3~1にはならない)
- 各観点の評価が全てB
→ 評定は3のみとなる
- 各観点の評価が全てC
→ 評定は2か1となる(5~3にはならない)

囲み内の関係の根拠は以下のとおりである。

観点別学習状況の評価のAには、Bに近いAもあるため、各観点が全てAでも、必ずしも5にはならない。また、Cも、Bに近いCもあるため、各観点が全てCでも、必ずしも1にはならない。

なお、6-2は、特に程度が高いAをⒶ、Bに近いCをⒸと記録する例示としている。

<参考>参考資料から
ABCの組合せから評定に総括する場合、各観点とも同じ評定がそろう場合は、「BBB」であれば3を基本としつつ、「AAA」であれば5又は4、「CCC」であれば2又は1とするのが適当であると考えられる。それ以外の場合は、各観点のA、B、Cの数の組合せから適切に評定することができるようあらかじめ各学校において決めておく必要がある。(参P17)

6-3-2 学年末の観点別学習状況の評価（詳細な記録）を基に、数値化して総括する例

以下は、学期末に総括した観点別学習状況の評価を基に総括する例である。6-2のような学年末の観点別学習状況の評価（詳細な記録）を基に、数値化して総括したものである。

Ⓐ：5点 A：4点 B：3点 ㉠：2点 C：1点とした場合

この場合、6-2の事例「ⒶBA」の組合せは下のような総括となる。

ⒶBA → 5点+3点+4点=12点 → 評定は4

その他の組合せの代表例と評定の基準例を下の表で示している。

組合せの代表例（合計点）	評 定
ⒶⒶⒶ(15) ⒶⒶA(14)	5 「十分満足できるもののうち、特に程度が高い」状況と判断されるもの (15～14点)
ⒶⒶB(13) <u>AAA</u> (12) ⒶBB(11) (※ ⒶAC ⒶAC)	4 「十分満足できる」状況と判断されるもの (13～11点)
ABB(10) BBB(9) BB㉠(8) (※ ⒶB㉠ ABC)	3 「おおむね満足できる」状況と判断されるもの (10～8点)
B㉠㉠(7) ㉠㉠㉠(6) ㉠㉠C(5) (※ A㉠C <u>㉠CC</u>)	2 「努力を要する」状況と判断されるもの (7～5点)
㉠CC(4) CCC(3)	1 「一層努力を要する」状況と判断されるもの (4～3点)

㉠CCのような組合せの場合には、身に付いた資質・能力のバランスが取れていないことが考えられる。
 そのため、該当生徒には注意して指導に当たりたい。

参考資料のP17で、観点別学習状況の評価結果のAについて、「『十分満足できる』状況と判断されるもの」と示されている。評定の4についても、同じく『十分満足できる』状況と判断されるものと示されている。